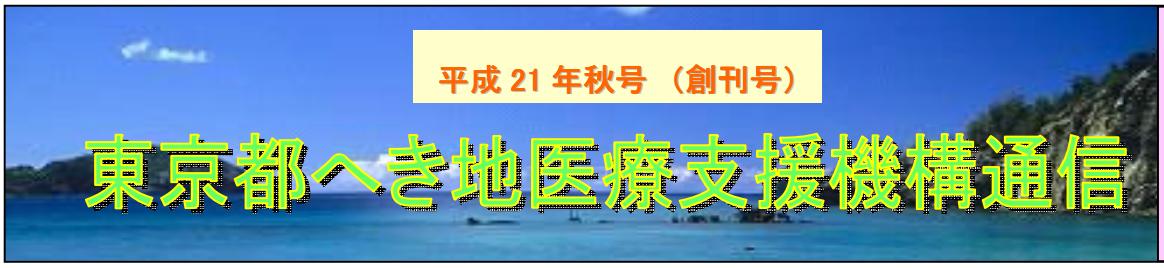


平成 21 年秋号（創刊号）

東京都へき地医療支援機構通信

【編集・発行】
東京都へき地医療支援機構
（東京都福祉保健局医療政策部救急災害医療課医療振興係内）

東京都では、国の第 9 次へき地保健医療計画に基づき、平成 17 年度から「東京都へき地医療支援機構」を福祉保健局医療政策部内に設置し、都のへき地医療支援事業を円滑かつ効率的に実施しています。

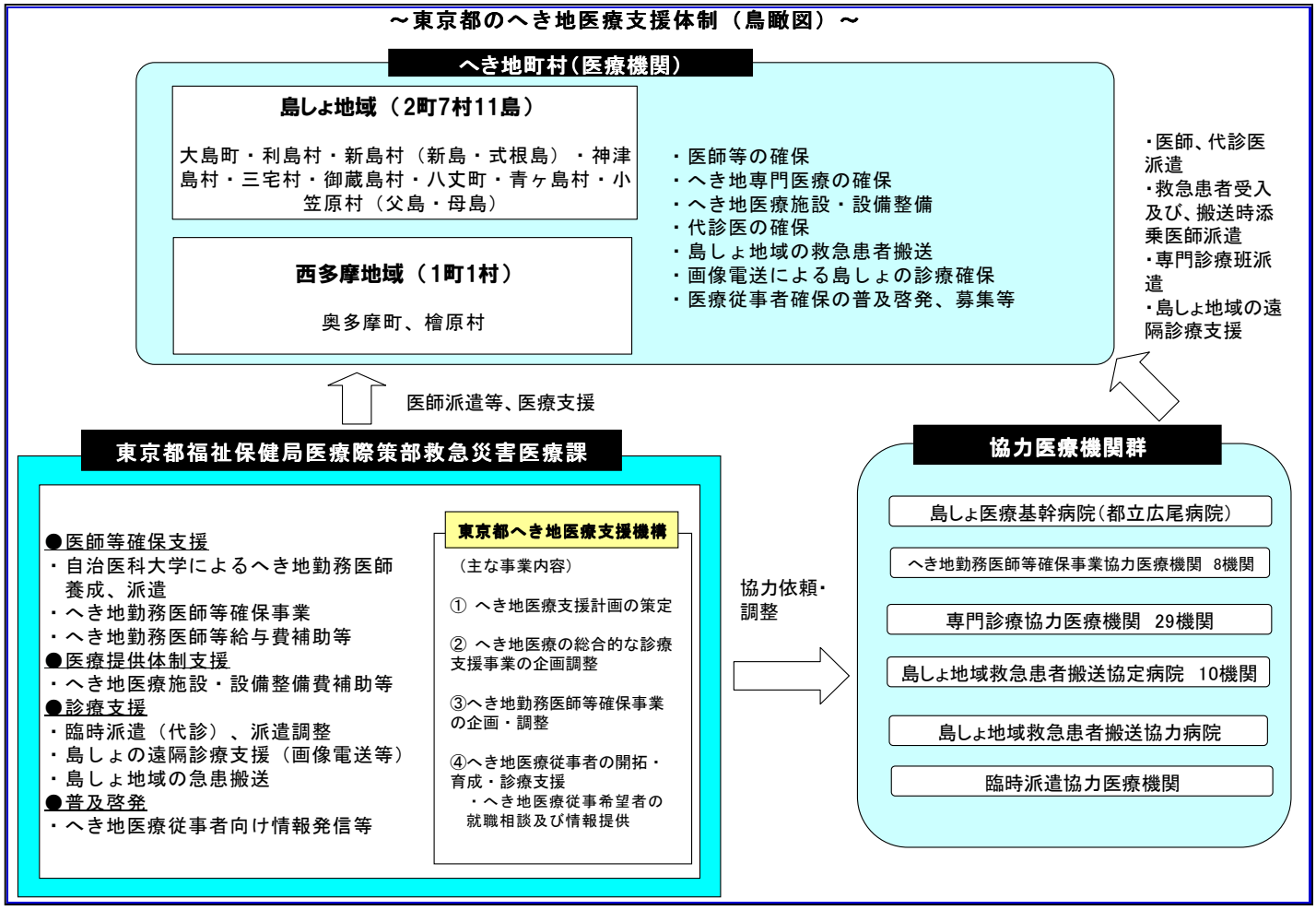
このたび、へき地町村の医療従事者確保・定着の取組みを支援するため、東京都へき地医療支援機構として、定期的に「東京都へき地医療支援機構通信」を発行し、へき地医療に関するさまざまな情報を発信していくこととしました。

東京都のへき地医療支援について

都は、医療の確保が困難なへき地に対して、本土との医療格差を是正するため、下図のように、協力医療機関群とともに､医師確保を中心に各種施策を実施し、へき地町村の医療を支援しています。

とくに、へき地の安定的な医療従事者の確保は困難なことから、本年 2 月、へき地医療支援機構内に無料職業紹介事業所を開設し、へき地医療機関の求人情報の提供や就職の紹介・斡旋を行い、へき地における医療従事者確保の側面的支援をしています。

へき地医療機関に勤務している方、これから勤務をされる方、へき地医療を支援している関係者が「みんなで支えるへき地医療｣の精神のもと､相互に連携し、へき地の住民に対して、より充実した医療の確保が図られるよう取り組んでいきます。



支援機構担当官から

東京都へき地医療支援機構
専任担当医師　　田口　健

東京都福祉保健局医療政策部の田口と申します。この度、「東京都へき地医療支援機構通信」第１号が発行の運びとなりましたので、一言ご挨拶させて頂きます。

私は、平成６年に自治医科大学を卒業し、都立病院で初期研修後、新島村・小笠原村・青ヶ島村において離島へき地の勤務を約４年間経験いたしました。そして９年間の義務年限が終了した後、東京都庁においてへき地医療行政に関わる仕事をしてまいりました。国の第９次へき地保健医療計画を受け、総合的なへき地医療支援事業の企画･調整等のため、東京都へき地医療支援機構が平成17年４月に東京都福祉保健局医療政策部に設置されてからは、専任担当医師として仕事をさせて頂いております。

東京都のへき地は、１町１村の山間へき地と２町７村11島の離島へき地からなり、約４万人の人々が暮らしています。大都会と思われがちな東京において、これほどのへき地があるということは、全国的に、また東京都民にさえも実はあまり知られていません。

これまで、東京都へき地医療支援機構では、医療人材確保の支援として、へき地勤務医師が研修・休暇等でへき地を離れる際の、代診医の確保・派遣を行ってきました。代診医の派遣実績は年間延べ500日以上に及んでおり、私も年間２ヶ月程は代診医として各へき地にお邪魔させて頂いております。

また、21年２月には、無料職業紹介事業所として届出を行い、へき地医療従事者の職業紹介事業を開始いたしました。

全国で医師を始めとする地域医療従事者の不足が問題となっていますが、プライマリケアあるいは地域医療を志向する医療従事者は確実にいます。しかし、インターネット等で簡単に情報を得ることが出来る時代にあっても、へき地医療をやってみたいという医療従事者の立場に立った東京のへき地医療の情報は十分とは言えない状況でした。

そこで、東京都へき地医療支援機構として、へき地医療の普及啓発のため、またへき地町村の医療従事者確保の取組みを支援するため、「東京都へき地医療支援機構通信」を発行することといたしました。現在のへき地医療について情報発信する場、また都、へき地自治体などの行政機関、へき地医療機関の従事者とが情報を共有する場として活用し、これによって、へき地医療に興味を持つ医療従事者の裾野が拡がっていけばと考えております。

季刊として年４回の発行を考えておりますが、内容については皆さんにご意見を伺いながら、へき地医療従事者にとって、本当に必要な情報が得られるニュースレターにしていきたいと考えております。

よろしくご愛読の程をお願い申し上げます。

～東京都のへき地医療機関と医療従事者数～

◆へき地医療機関

東京都には、３町８村の「へき地」と呼ばれる地域があり、へき地医療機関が地域医療を担っています。無医町村はありません。

＜山間地域＞　奥多摩町、檜原村

＜島しょ地域＞　大島町、利島村、新島村（新島・式根島）、神津島村、三宅村、御蔵島村、八丈町、青ヶ島村、小笠原村（父島・母島）

山間・島しょの地域には、公立・民間併せて、一般医療機関が26、歯科医療機関が22あります。

◆医療従事者数（公立医療機関、H21.4.1現在）

単位：人

医師	32	臨床検査技師	4
看護師	93	臨床工学技士	1
助産師	6	歯科医師	5
薬剤師	5	歯科衛生士	5
放射線技師	9	歯科技工士	1
理学療法士	4	合　　計	165

医療従事者にインタビューしました！

毎号、へき地の医療機関で勤務している、又は勤務経験のある、様々な職種の医療従事者を取材します。勤務の様子やへき地医療の現状、へき地での生活等、へき地医療の魅力を大いに語っていただきます。

第１回目の今号では、東京から約1,000km離れた小笠原村父島の診療所に勤務する医師と、イルカウォッチングで有名な御蔵島村の診療所に勤務する看護師の方にお話を伺いました。

医師　高田　寿先生（48 歳）
（村立小笠原村診療所）

「地域医療の現場に身を置いて」

小笠原村（父島）DATA
場所：東京の南 984 キロ　人口：約 2,000 人
交通：定期船（東京竹芝～父島）約 25 時間半

――現在の診療所で勤務するきっかけは何ですか？
　医大を卒業後、都立広尾病院で研修を行いました。初期研修終了後､広尾病院のスタッフとして整形外科、救命救急センター、救急診療科（ＥＲ外科）の勤務をしましたが、広尾病院が島嶼医療を重点医療の一つに掲げていた関係で、小笠原には飛行艇搬送の添乗医として数回、また代診医として父島に 5 回、母島に 2 回派遣されました。（伊豆諸島での代診経験もあります。）小笠原村診療所で働くきっかけは、広尾病院でお世話になった自治医大卒業の先生方の影響と以前から地域医療に興味があり、体が動ける間に地域医療の現場に身を置いてみたいと思ったからです。

――診療所はどんなところですか？
　小笠原島へは、東京竹芝桟橋から 6 日に 1 便のおがさわら丸（船）に乗って行くことになります。所要時間は 25 時間 30 分という超遠隔離島です。東京からこれほど時間のかかる地域ですが､それでも東京都です。昭和 43 年 6 月にアメリカから返還された影響もあり、どことなく異国情緒にあふれています。本日の気温は 26 度でした。（11 月 19 日午後）内地の東京は 9 度ということなので、東京都の広さをしみじみ感じます。
　診療所は、おがさわら丸が着く港から徒歩で約 10 分の高台にあります。スタッフは医師 2 名、看護師 5 名、助産師 2 名、歯科は医師 1 名、歯科技工士 1 名、歯科衛生士 1 名、事務 4 名です。現在、道路を隔てた向かい側に来年 5 月にオープン予定の新診療所を建設中です。2 階には老人ホーム開設予定で、新しいスタッフをこれから募集するので、ぜひ応募してください！

――1 日の仕事の流れを教えてください。
　朝 8 時にはスタッフが集まります。8 時 10 分から全スタッフのミーティング。引き続き医科スタッフミーティング。9 時から 12 時まで午前外来診療。1 時間 30 分の昼休み後、13 時半には再度スタッフが集まります。（スタッフのほとんどは自宅が近いため、昼食を食べに一時帰宅します。）午後の診療は、14 時から 17 時までで、水曜日だけ午後の外来診療がありますが、他の曜日は、妊婦健診、乳幼児健診、学校健診、予防接種、介護認定審査会などの会議で動き回っています。救急患者に対しては 2 人の医師と 5 人の看護師、2 人の助産師で当番に当たり、随時対応しています。

――診療所での勤務はいかがですか?
　代診で派遣された他の島と比べると、医師が 2 人しかいないせいか、日々、忙しく診療を行っています。昨年の 1 日平均患者数は約 33 人､年間だと 8 千人を越えました。高齢者より、小児や妊婦を診察することが多いように感じます。

――診療所で勤務するようになって嬉しいと感じたこと、又は大変なことを教えてください。
　嬉しかったのは、重症な救急患者を飛行艇で内地の病院へ無事に搬送し、治療を受け、元気になって島に戻られたと聞いた時です。逆に、大変なことは、専門外の患者を診察する際に、内地の専門医と相談しながら、診察・治療に当たることです。

――島での生活はどうですか？
　職場と自宅が近いため、昼食時に自宅に帰って食事ができるのは良いですね。通勤時間もかからないし、ここでは通勤ラッシュもありません。
　一方、困ったことも幾つか。夜間休日の当番日は、携帯電話に連絡が入ることになっているので、携帯電話の電波状態が悪い地域があるのは困ります。また、自然が近い分、梅雨時期のカエルの大群や夏前の羽アリの大群が出たり、部屋にはやもりが同居。（慣れました！）夜間､やすでが診療所を襲撃したこともありましたね。その他、天気の悪い日が続いて、おがさわら丸の入港が遅れると、野菜や牛乳など生鮮食料品が売り切れてしまう｡商店が 18 時半には閉店してしまうので、急患で買い物に行きそびれた時は、夕食がインスタントラーメンだけのこともありました。

――休日は何をして過ごしますか？
　自然を相手に、子どもたちと遊びます。子どもたちが自然の中で伸び伸びと楽しそうに遊ぶ姿を見ると、とても嬉しく思います。

――最後に、へき地医療を希望する医療従事者へのメッセージをお願いします。
　へき地医療に携わる医師は、冷静な気持ちと協調性を持ち、いろいろなことに興味を示し、何でも経験体験しようとする前向きな気持ちを持つことが大切と思います｡また、自分なりの息抜き方法を見つけ出しておくと良いと思います。

――ありがとうございました。

看護師　西村　恵理奈さん（33 歳）
（御蔵島村国保御蔵島診療所）

「温かい人間関係に触れ、楽しく仕事をしています！」

――現在の診療所で勤務するきっかけは何ですか？
　学生の頃、イルカの研究調査で初めて御蔵島を訪れました。看護師になってから、その時に知り合った友人の誘いもあり、『広報東京都』に載っていた求人情報を見て応募しました。

――診療所はどんなところですか？
　診療所は港から車で 3 分のところにあります。1 階が診療所、2 階は医師住宅です。島民はみな顔見知りなので、診療所の待合いはいつも賑やかです。一日の外来患者数は平均 8 名程度ですが、乳幼児からお年寄りまで様々です。入院病床は 2 床あり、年に数回稼動します。医療スタッフは、医師 1 名、看護師 2 名、事務 1 名の合計 4 名で、協力しながら診療に当たっています。

――1 日の仕事の流れを教えてください。
　8 時半に出勤し、午前中が外来診療、昼休みを挟んで、午後は予約診療、各種健診、予防接種、往診、訪問看護、リハビリ等を随時行っています。健診は、診療所のスタッフだけでなく、保健師とも協力して行います。週 1 回は何かしらの健診をしていると思います。終業は 17 時 15 分ですが、休日夜間はオンコールで急患対応を行います。

――診療所に勤務して良かったことを教えてください。
　待合で患者様と話していると、患者様の健康面だけでなく、生活や性格を知ることができます。話が弾むと、いつの間にか周りの方も加わり、みんなで大笑いしているなんてこともしばしば。子どもが診療所で初めて歩いた時には、その場にいた全員で見守り歓声を上げたのを覚えています。患者様とのんびりと穏やかな時間を共有できるのはいいですね。ここでは、ひとりの患者様に時間をかけて関わることができるので、その方にあった働きかけができるようになりました。

――逆に、苦労したことがあれば教えてください。
　小規模の診療所の大変なところは、「限られたスタッフ」と「限られた資材」で診療しなければならないことです。看護師が 2 人しかいないため、入院患者様がいらっしゃる場合には、日勤・夜勤を交代で務めることになります。
　また、検査技師や薬剤師はいないので、医療機器のメンテナンスや薬品の発注、レセプトの作成等もしなければなりません。看護業務以外の仕事は慣れるまでが大変でした。

御蔵島村 DATA
場所：東京の南約 200 キロ　人口：約 300 人

――島での生活はどうですか？
　子どもからお年寄りまで皆さんと話すことができ、同年代の友人たちにも支えられ、充実した生活を送っています。島民と一緒に、夏祭りや敬老会、運動会といった行事に参加できるのも楽しみのひとつです。困るのは、最新の治療法等の情報が入りにくいことと、天候が悪いと容易に出島できないことです。

――目標は何ですか？
　現在の仕事は、外来診療だけではなく、健診やリハビリ、訪問看護等、様々です。とくに、在宅看護や地域看護は、今後さらにニーズが高まってくると思うので、もっと勉強したいと思います。

――最後に、へき地医療を希望する医療従事者へのメッセージをお願いします。
　以前、内地の総合病院で勤務していたときと比べると、一人ひとりの患者様にじっくりと向きあう看護ができるようになりました。私は島に来て 3 年ですが、温かい人間関係に触れ、毎日、楽しく仕事をしています。人が好きで自然が好きな方であれば、ここでは、楽しく働くことができると思います。

――ありがとうございました。

診療所のスタッフと（右端が西村さん）

【編集・発行】
東京都へき地医療支援機構（東京都福祉保健局医療政策部救急災害医療課医療振興係内）
電話　03-5320-4428　Fax　03-5388-1441
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/sonota/hekichi_shienkikou/index.html
メール　0000299@section.metro.tokyo.jp
☆★ご意見・ご感想をお寄せください★☆